様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：２５４０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ２１２９６

研究課題名（和文）エストニア・アニメーションにおけるシュルレアリスム受容の調査研究

研究課題名（英文）Study of Surrealism accepted by ESSR Animation

研究代表者
有持　旭（Arimochi, Akira）

広島市立大学・芸術学部・講師

研究者番号：３０７５９７８３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して、アニメーション作家やシュルレアリストたちから当時の記録写真や動画、証言を入手することができ、それらによって、エストニア・アニメーションにおけるシュルレアリスム受容に関する史実を明らかにした。アニメーションを20世紀芸術のシュルレアリスムと比較研究することで、美術史を内包した深長な視点からアニメーション史のなかでは語られないエストニア・アニメーションの位置付けを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究成果によって、未だ世界であまり知られていないエストニア・アニメーションの歴史を紹介するとともに、その歴史に関与してきた前衛芸術グループの活動や風刺画文化を適例として、広域的に「アニメーション」の表象に関する考察の発展に繋がっていくと予想される。また、母国語のエストニア語で行ったオーラル・ヒストリーは、それ自体が資料としての価値があると考えられる。アジアではこれほど詳細なエストニア芸術に関する研究は初だと思われる。また、数少ない貴重な先行研究のほぼ全てのものにみられた、年代や名称等のいくつかの誤りや不明瞭な解釈に対して、本研究では信頼性の高い資料を得たことで修正・補足することもできた。

研究成果の概要（英文）：I was able to obtain historical photographs, videos and many testimonies from animators and surrealists through this study. Based on them, I clarified the historical facts about Surrealism accepted by Estonian (ESSR) Animation. I made positioning of Estonian animation, which it was not told in the history of animation so far, from the deep and wide viewpoint which included art history by doing a comparative study Animation and Surrealism of the 20th-century art.

研究分野：アニメーション史

キーワード：アニメーション　エストニア　シュルレアリスム　風刺画　比較美術史

様 式 Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現代においてなおシュルレアリスムの影響を強く受け続けているアニメーションはチェコとエストニアの作品であろう。チェコにおいてはその研究が進んでいるが[1]、エストニアは殆どされておらず不明瞭な部分が多い。歌を歌うことでソビエトから独立したエストニアは Skype を生み出した IT 先進国である。この特異な歴史と文化形成を持つ国で作られるアニメーションは、ユーリ・ロトマンの記号論とも接近し、また、表象と構造にユーモアと社会的テーマを持ち合わせている。国外では 2006 年にエストニア・アニメーションに関する図書[2]がイギリスから刊行され、およそ 20 人の作家が概略的に紹介された。現在その作家たちを牽引しているプリート・パルンは、元風刺画家でありシュルレアリスムの系譜に位置すると言われている。彼の作品には不条理と風刺が含まれており、1980 年代から現在まで殆どのエストニア人作家が影響を受けているとも言われている。

アニメーションとシュルレアリスムの関係に関しては興味深い点がある。例えば、シュルレアリストであるアンドレ・ブルトンはテクスト『Le Peinture animée』の中で動く絵について言及し、またマックス・エルンストは作品にアニメーションの視覚装置であるゾートロープの画像を用いており、アニメーションへの関心が伺える。こうしたシュルレアリストらの時間や運動への関心に対する論考は、未来派と比較する論や視覚論へと考察を広げた論[3]などある。だが、メディア芸術への注目が高まる今日、研究はシュルレアリスムを時間・運動芸術であるアニメーションへ発展させ包含する段階まで至っていない。

エストニア・アニメーションがシュルレアリスムから受けた影響に関する本研究は、ソ連時代のエストニア芸術を知る術でもあると考える。今日までエストニア・アニメーションが作り出す物語や記号を的確に論じることができず、これらが表す社会的テーマを明らかにできなかったのはそういう点からであろう。エストニア・アニメーション史を形成させていくには、歴史の認識や当時の作家のみが知る情報が必要であり、このことが未だ詳細な研究に至っていない理由の一つと言える。

註：

1 赤塚若樹、シュヴァンクマイエルの世界、国書刊行会、1999

2 Chris Robinson, ESTONIAN ANIMATION, John Libbey Publishing, 2006

3 Rosalind E. Krauss, The Optical Unconscious, 1993

２．研究の目的

本研究では、エストニア・アニメーションのシュルレアリスム受容を調査することによって、エストニア・アニメーション史の研究を大きく補填し、なおかつこの国のアニメーションの記号性とシュルレアリスムの表象における類似とその差異を読み解くことが目的である。

主に以下に列挙した問いの解明を目指す。(1)プリート・パルンの初期作品『なぜ地球は丸い？』(1977)から近作『帰路のパイロットたち』(2015)までを対象に、シュルレアリスムという西洋芸術の導入、及びソ連時代と独立後の社会情勢の差異がアニメーション表現にどのような影響を及ぼしたのか。(2)パルンの創作活動をアニメーション以外に風刺画や絵本など多角的に把握し、そこに内在するシュルレアリスムとの相異点、及びそれによる物語展開やモチーフによる記号の効果。(3)パルン以前と以後に活動した他の作家にみられるシュルレアリスムからの影響。(4)シュルレアリスムがフランスからどのように北進しエストニアへ影響を及ぼしたのか。

３．研究の方法

研究期間の3年間における共通した方法は、文献調査及び作家や学芸員への聞き取り調査による資料収集とその分析である。対象は主にプリート・パルンであり、彼の作品と創作活動に関する資料（絵コンテ、メモ、イメージ画、原画など）をみながら、テーマ・素材・技法について分析し、1920年から30年代パリの「シュルレアリスム」と照らし合わせながら考察を行った。研究のために訪問した機関は、エストニア国内のアニメーション・スタジオ、作家のアトリエ、映画祭、芸術大学、美術館、図書館、公文書館などである。文献調査と聞き取り調査は相互に付随する形で行い、これらを行き来する形を取った。インタビューは、母国語のエストニア語で1人あたり1時間から2時間、計14名に行った。そのうち研究の中心であるパルンは例外的に15時間行った。これらは録音データとは別にHD動画撮影も行っている。その他に収集した主な資料として、文芸新聞『Sirp ja Vasar』1979年から86年の8年分、風刺雑誌『Pikker』356冊(約15年分)、そのほか雑誌『Noorus』や『Täheke』、絵本、風刺画集、当時の展覧会カタログなど約60冊、さらにはシュルレアリスム・グループの記録写真と動画である。入手できなかった新聞『Edasi』などの現物は図書館にて出来る限りデータ化した。

４．研究成果

まず、オーラル・ヒストリーとして、プリート・パルンを含む3名のアニメーション関係者にパルンの創作活動に関してインタビューを行った。しかし、予定していたその他のインタビューイ2名の諸事情により調査が実現できない事態も生じた。聞き取り調査によって、エストニアのアニメーション作家たちが1960年代後半から90年代前半まで様々な印刷媒体に風刺画を描いていたという証言が得られた。さらに、パルンら風刺画家たちが前衛芸術グループとしてシュルレアリスム・グループを結成し、オブジェ作品などを制作していたという証言も得られた。これらの証言に基づき、図書館や公文書館での文献調査や『Sirp ja Vasar』、『Pikker』、『Noorus』、『Täheke』等の当時の印刷物の現物を収集し分析した結果、アニメーションと風刺画とシュルレアリスムが緊密的に関係している史実が明らかとなった。また、エストニアで行われたアニメーション映画祭Animated DreamsとPriit Pärna Animafilmifestivalでは、アニメーション関係者以外にも観客や映画祭スタッフといった幅広い層に対して、シュルレアリスムの影響に関する認識を調査することができた。

次に、エストニア周辺諸国からの影響を調査した。初年度の聞き取り調査の結果、エストニアのアニメーション作家や風刺画家たちは、ポーランドやチェコの風刺画に影響を受けていたことがわかった。そのため、ワルシャワとクラクフ、プラハでの実地調査によって、1960年代の資料入手に務めた。またフランスでは、シュルレアリスムに精通している哲学者ジョルジュ・セバック氏からブルトンのテクストについて専門的知識を得ることができた。その後、エストニアにおいて公文書館、美術館、図書館、アニメーションスタジオを軸に、現地研究補助員の協力も得て、貴重な新聞や雑誌を収集することができた。さらにアニメーション作家、風刺画家、学芸員、美術雑誌編集長など合計7人に聞き取り調査を行った。この際に、当事者から記録写真と動画を拝受することもできた。こうして得た一次資料を基に、アニメーション作家とシュルレアリスム・グループと風刺画家の相互関係について検証した。なぜアニメーション作家たちはシュルレアリスム・グループを結成したのか、その「シュルレアリスム」とはどこから影響されたものなのか等の問いを解明し、これまで抽象的に「エストニア・アニメーションはシュルレアリスムに影響を受けている」と言及されてきた事に対し立証し、エストニア・アニメーション作家の側面を明らかにした。

そして2年間の調査資料を基に、エストニア・アニメーションにおけるシュルレアリスム受容に関して考察した。その過程で新たに出現した資料の不足箇所や問いを解決するために、再度エストニアで実地調査を行った。これらの調査は、独立以前に開催された風刺画展やエストニア芸術協会の活動とアニメーション作家との関係性をも踏まえている。これらの調査の成果として、例えば、パルンがどういう理由で「シュルレアリスム」という言葉を使用したのか、ソビエト社会と関連付けながら明らかにすることができた。また資料として、シュルレアリスム・グループで制作されたオブジェ作品、アニメーションの絵コンテや原画を撮影し記録した。こうした成果のほか、想定外に、異なる前衛芸術グループに属する作家たちが一堂に会合し開催したシュルレアリスム関連イベントの記録写真を入手することもできた。

本研究によってさらに探求する必然性を感じたものがある。それはシュルレアリスムや風刺画文化と関係があった、元国営映画（アニメーションも含む）スタジオ「タリンフィルム」の活動である。今後の展望としては、このことを中心にエストニア・アニメーション史をみていく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

(1) 『ホテル E』の不条理―変革期エストニアで制作されたアニメーションに関する分析―、近畿大学文芸学部論集『文学・芸術・文化』、査読有、2019 年

〔学会発表〕（計３件）

(1) 『Hotell E』によるパルン分析、日本アニメーション学会第 20 回大会、西南学院大学、2018 年 6 月

(2) 《タリンフィルム》シュルレアリスト・グループの活動、日本アニメーション学会、2017 年11月

(3) プリート・パルンの風刺画から読み解く〈不条理〉、日本アニメーション学会、青森県立美術館、2017年6月